

<書評>ラディカルな沖縄の〈当事者〉：屈折するインテグリティと沖縄戦後史プロジェクト（屋嘉比収著『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす：記憶をいかに継承するか』世織書房、二〇〇九年）

阿部，小涼

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

291

(終了ページ / End Page)

316

(発行年 / Year)

2012-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007985>

ラディカルな沖縄の〈当事者〉

—— 屈折するインテグリティと沖縄戦後史プロジェクト

(書評…屋嘉比収著『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』世織書房、二〇〇九年)

阿部 小涼

はじめに

本書は沖縄の、あるいは沖縄を学ぶ学生たちにとつての僥倖である。

序章に相当する「はじめに」と本論一三章を併せた全一四章の構成が、一個学期一五回の授業を想定した教科書として適しているからだけではない。各章は論文として完結していながら、おおよそ事例の時代に沿って配置されており、この年代順の編纂は、表題のとおり沖縄戦から米軍占領期の歴史分析として本書を位置づけることに成功している。これは、屋嘉比による一〇年に及ぶ「戦後史プロジェクト」の成果なのである。各章は問題提起と議論、結論が美しく書き分けられ、学生たちは、こ

これらのうちからひとつの章を、座右の論文として自らの論文執筆の範とすることになるだろう。

別の見方をすれば本書は、戦争の記憶論争、追悼の政治学、教科書問題から、開発主義経済と東アジア冷／熱戦史、国境／越境論など、ポストコロニアル・スタディーズを貫く問題構成について、具体的な事例を用いながら論じる手法の指南書のようなものである。本書で使用された批評理論の数々は、沖縄研究を越えて多岐にわたり、脱構築からポストコロニアル・スタディーズに向かう批評理論をどのように経由して来たのか、著者の足跡を示している。同じ時代に、関心を共有しながらその後を追うように研究してきた筆者のような世代にとっては、深く首肯できる碩学たちの一覧と重なる。この点で本書は、二〇〇〇年代の批評理論をマッピングする学説史としての読み方もできよう。

筆者が、重厚な批評力を備えた歴史学として感嘆をもって屋嘉比収の研究に出会ったのは、一九九八年の歴史学研究会大会、二〇〇〇年六月発行の雑誌『現代思想』に掲載された「ガマが想起する沖縄戦の記憶」（本書第二章に収録）、そして二〇〇一年の新聞連載であった。同年九月に第四回沖縄研究国際シンポジウムが開催されるにあたり、皇族が招かれ記念講演を行った事態に、屋嘉比収、新城郁夫、伊佐真一の三氏が批判を寄せた。¹「沖縄研究の存在意義やその認識が問われる」とした屋嘉比の指摘は、時宜を得て公的に行われる批評の重要性を示してあまりあるものだった。²

沖縄の内外を問わず、自身も含まれる研究コミュニティに対する妥協を許さない屋嘉比の批判的態度は、その文体に特徴的に現れている。研究動向を踏まえ丁寧な評価を示した上で、「しかし」と転

じる。果たしてその先には内省的で厳しい問題提起が展開するのである。そうしてみると屋嘉比の選び出すことばには、内省的な批判に向かう二重の意味を帯びた、抜き差しならないところがある。たとえば第四章の「仲間内の語り」ということばは、暗に、予定調和に陥りがちな研究業界に向けて放たれた矢のように読めるだろう。³第五章「質疑応答の喚起力」⁴で加藤典洋の文章の批判的読みに並置されているのも、沖繩における戦争を祈念し継承する行為への厳しい視線であった。聞くことを姿勢ではなく能動的な行為として提示する屋嘉比にとって、問題は沖繩の側の「聴くという行為」（本書「以下同」一二二―一二三頁）だったのである。

また屋嘉比の文章作法の個性は、怒濤の繰り返しによる強調にある。

「他者の視点の欠如と他者の排除の問題点」、「言い換えると」、「他者の視点を排除し欠如した語り口」、「最後に、もう一度繰り返し返そう」、「表情豊かな語り口のなかに潜む、同じ言葉を共有している語りがもつ排除する問題」（一二二―一二三頁）

屋嘉比は、導き手とした批評理論を自在に解題・翻案するというよりは、自分の領分に引きつけたうえで繰り返し、繰り返し、同じ地点で問い詰める作業を行っていることが伺えるだろう。

とりもなおさず筆者にとって屋嘉比さんとは、業火の舌の人、貫く剣の筆の人、揺るぎなく問いを

手放さない人だった。温厚で柔和な人だとその人柄を評されるが、紙幅から瑞々しさをたたえてほとばしるのは、批評的怒りの激しさである。本書を手に取った読者たちは、はたして、その手に刻印を残されただろうか。

こうしたことをまず、確認しながら、屋嘉比の思索の森へ分け入ってゆこう。ただし紙幅には限りがあり、すべてを言い尽くすことは不可能である。⁵⁾ また多くの沖繩研究の論客たちの手によってすでに重要な指摘は果たされてきたようにも思う。本論考によって、それらの批評の余白にいま少しだけの追記ができればと思う。具体的には、「はじめに」でなされた問題提起、第一章の共同体論、第三・一〇・一章をつなぐ屋嘉比の研究の系譜学について採り上げた後、本書に直接沿った内容とはやや距離を置きつつ、屋嘉比の論考に共通するいくつかの批評点に触れてみたいと思う。

〈当事者〉に〈なる〉のラディカルさ、学びなおす

「はじめに」は、本書の序論として大きな問いが、紛れもない明晰さをもって提示されている。全体を貫く問題意識と問題構成が集約されていると同時に、本書における重要なふたつの書き下ろしのうちのひとつでもある。「沖繩に生まれ育ったという〈特権〉」とまで言い及んで、「沖繩人」という

アイデンティティの本質主義化を厳しく批判する屋嘉比が、別の選択肢として立てたのが、「沖繩人に〈なる〉」だった。〈当事者性〉は事後的に獲得可能であるとする認識であり、そうした認識こそが、戦後世代による沖繩戦の歴史経験の継承を支えるという。紛れもなくこれは、本書を決定づける重要なアイディアの核心である。

仮に沖繩戦の体験者を沖繩人と規定すると、戦後世代の非体験者である私たちは沖繩人ではないということになる。沖繩人でない私たちが、沖繩戦の体験を分有しながら〈当事者性〉を獲得していくことによつて、どのような沖繩人になるのか。(iv～v頁)

この「沖繩人に〈なる〉」は、スチュアート・ホルルの「である」から「になる」⁶⁾への書き換えを、「沖繩人になる」との刺激的な問題提起として行つたものだ。沖繩戦の非体験者がいかに〈当事者性〉を獲得するかという記憶の政治学の文脈において展開されるこの回答には、しかし、注意深く聞き届けなければならない地下水脈が埋め込まれてはいないか。すなわち、だれが沖繩人になるのか。屋嘉比は、「仮に」と留保しつつも、戦後世代は沖繩人ではないと驚くべき否定を行う。そのうえで、沖繩戦の非体験のために沖繩人ではない「私たち」は、体験の分有によつて〈当事者〉すなわち沖繩人に〈なる〉という。彼のいう「私たち」をまず一義的に沖繩人であると措定し、沖繩人が「沖繩人」

になるとだけ読むことは十分に可能だ。しかし、行き過ぎた読みとの批判を覚悟の上で、現在、沖繩人と呼ばれることのないすべての人に、「沖繩人に〈なる〉」が開かれていること、そのようなラディカルな提案が埋め込まれていることを、強調しておきたい。

さらにこの〈なる〉が、沖繩を対日本という拘泥から引きはがして、アジアの時空のなかで批判的に検討されるべきものとして提起されている点は重要である。この点で、屋嘉比の〈当事者性〉とは、本質化を脱臼しつつ主体を實踐する行為エイジェンシそのものであろう。⁷⁾

序論のなかで提示されるもうひとつの重要なアイデアは、本書のタイトルにある「学びなおす」という語に込められている。この語が、筆者を含めて、スピヴァックの「学び捨てる」(unlearn)を継承しているものと即断した読者は多いと思う。しかし、unlearnは、第二次大戦前のニューヨークでヘレン・ケラーに邂逅した鶴見俊輔の「学びほぐす」⁸⁾、その鶴見とホスピスケアで知られる徳永進医師との対談に係留されながら、ジェイムズ・クリフォードの批評を通してこの語に出会ったことを述懐する大江健三郎の「学びなおす」⁹⁾、という異なる二つの根を経由しながら、屋嘉比のもとに届けられた。屋嘉比にとってこの語は「継承することの前提にある対話」(三六八頁・注9)を重視するための鍵だったのである(こんなに大切なことが、巻末注に小さな声で囁くように記されるとは！)。

個と共同体の合一的な融合の果てに……

第一章「戦後世代が沖縄戦の当事者となる試み」は、社会評論社の「沖縄・問いを立てる」シリーズのうち、屋嘉比が編集を担当した第四巻『友軍とガマ』に掲載された論考である。¹⁰⁾ 沖縄戦の（当事者）となる、という問題提起への回答として、沖縄戦をめぐるナラティヴを、その生成からマスター・ナラティヴ化まで再検討したうえで、焦眉の話題としての「集団自決」をその継承という観点から論じている。結論は、市町村史の現場で編纂作業に併走してきた研究者だからこそ可能な非常に厳しい分析となった。そのように読める理由のひとつは、「集団自決」の呼称をめぐる彼の立ち位置の表明である。ノーマ・フィールドを引用しながら「『強制的集団自決』という語句にこだわってみたい」（五二頁）との決然とした表明によって、この文章は今後、何度も繰り返し参照されるべき論考となった。

もうひとつが、沖縄戦の記述の「マスター・ナラティヴ」化という分析である。すなわち、家永裁判から今日に至る教科書問題の法廷闘争から生み出された沖縄戦の記述の洗練を、成果として受けとめつつ、「今問われているのは、客観性や実証性という事実の一義性を最重要視する法廷における証言のあり方だけを重視するのではなく、それから疎外され排除されたもう一つの『証言』への注視」（三四頁）であるという。

金城重明の渡嘉敷での証言を引きつつ、「個人と共同体が合一化した状況下」で、「愛するがために」という心情を自ら引き寄せていったのはなぜか（四〇頁）と屋嘉比は問う。岡本恵徳が「水軸の発想」で詳らかにしたように、「集団自決」はこれまで共同体論と復帰運動の問題として思考されてきた。¹¹屋嘉比もそれに首肯しつつ、しかし復帰とは「ひとまず切断して考えてみたい」（四二頁）と踏みとどまる。そしてジャン・リュック・ナンシーを手がかりに、共同体を問い質す脱臼としての他者の声、「死にたくない」「逃げる」という亀裂を呼び込む声について、まさに、呼び込むように語り始める。

「愛するがために」という思考は、個と共同体の合一的な融合による「死に準拠した共同体の自殺の論理」の反転した裏面だと言えるのではなからうか。そして注目すべきは、その「愛するがために」という思考を超える一つの方途として、個と共同体の合一的に融合した「自己（共同体）の声」に亀裂を入れる「他者の声」を聴いて生き抜いた人びとの発言と行動への注視である。くわえて、戦後世代で非体験者である私たちが聴く声とは、日本軍の上意下達によるタテ構造の強制の末端で、個と共同体の合一的な融合の声に亀裂を入れる「他者の声」を聴いて生き抜いた、そのようなスライバー（豊かな人）の声と行動ではなからうか。（四九頁）

サヴァイヴァーから精神的な成長や超克の状態に至った人を指すスライバー (thriver) という語、そこに括弧書きで「豊かな人」の意味が宛てられているのを見るだけで十分に、屋嘉比がこの「他者の声」という視点を獲得したことの学問的高揚を感じ受できるだろう。

ここで屋嘉比的文章作法であるところの怒濤の繰り返しによって強調されるのが「個と共同体の合一的な融合」という語である。ブランシヨ「明かしえぬ共同体」からナンシーを経由した「無為の共同体」の、死に準拠を求める共同体論が、第四章で言及される酒井直樹「共感の共同体」へと乱反射していくとき、屋嘉比の論の強度が立ち現れるのは、彼がそこからの離脱を指し示しているからに他ならない。彼が見出したのは、沖繩戦の当時、「他者の声」を聞き亀裂を呼び込んで生き抜いた分かれ道であると同時に、現在、語られはじめた別の／新しい証言を聞き届けることで起こる亀裂、新しい歴史叙述の分岐点なのである。

ミッシングリンクと失われた問い

初出論文から本書収録までの経過を、屋嘉比収の戦後史プロジェクトの系譜学をたどるように再構成するのは興味が尽きない。第三章「沖繩戦における兵士と住民」¹²の終盤で屋嘉比は、ふたつの住民虐殺の事例を参照しながら、沖繩戦の住民虐殺について考察している。沖繩で起こったのは「非国

「民」化であつて、反共アカ狩りが沖縄戦において不在であり、現れるのは沖縄戦後、米軍の占領下のことだ、との性急な指摘にはいささか違和感が残った。

違和感は、この章の元になった初出を手にすることで溶解する。初出には存在した「むすびにかえて」が割愛されたために、この疑問を解く鍵が失われたと判るからである。『岩波講座 アジア・太平洋戦争5 戦場の諸相』（二〇〇六年三月）には存在するその「むすびにかえて」は、冒頭で「戦場」「占領」「復興」を考察するための二つの論点を提示している。

一つは、「中略」今後、冷戦体制下における米軍の存在と「アカ狩り」の意味は、あらためて問われるべきテーマだといえよう。

もう一つは、「戦場」「占領」「復興」を時系列に単線的に推移するものとしてとらえるあり方を問い直すことである。¹³⁾

また削除された大部分は、本書『学びなおす』第一〇章「重層する戦場と占領と復興」の第四節「二つの問題提起」（二二六頁）で、構成を変えて再録されていることが判明する。割愛された二つの問いは、その後の著作へと引き継がれていったのである。

第一〇章（すなわちその初出となった青弓社『沖縄の占領と日本の復興』所収論文）は、二〇〇四

年一二月に沖縄大学で開催されたシンポジウムの持ち方についての議論が基になっている¹⁴。屋嘉比は絞り出すような調子でたたみかける。

沖縄では、「戦後への問い」は過去に対する問いではなく、「沖縄の現在」に対する問いと直結している。沖縄では、「戦後」を問うことは「現在」を問うことであり、「沖縄の現在」を問うことは、「沖縄の戦後」を問うことを含意している。(二一五～二一六頁)

ところが、「そのような認識に対して、復帰後の沖縄は日本国家の法制度下であり、戦争時やアメリカ軍占領下とは異なる状況にあるとの批判が一部から聞かれた」(二二三頁)のだという。屋嘉比は言う。

私たちは、形式的な法制度や真相を覆いかくした表層的な状況から考えてことたりとするのではなく、そのような事件によって、継続する戦争と占領が顕現化した有事のなかの「沖縄の現在」にこそ、焦点を当てて批判的に論じるべきではないだろうか。(二二三頁)

日本側から差し向けられる研究認識が、沖縄から見ればあまりにズレていることへの苛立ちは筆者

もしばしば体験することである。このような研究状況を踏まえてなされたのが、「戦場」「占領」「復興」が重層的に混在し同時並行的に進展していたととらえる被支配者や被占領者の視点が重要との主張である。ほとんどマニフェストと言ってもよいような苛烈さをその行間に読み取ることができ。ここで、「二つの問題提起」の一つ目は、「戦後に継続する東アジアの戦争と言う論点」と書き換えられることになった。『戦場の諸相』で提示した問いの、二つめの問いを、さらに二つの問いに腑分けすることによって、東アジアという立脚点をよりクリアに前面に押し出すことを選択したのである。この方針変更によって屋嘉比は、転換か継続かを見極めることに集約されがちな、時期区分という日本近現代歴史学のディシプリンが持つ課題を浮かび上がらせることに成功した。

アメリカ軍と日本軍との違いはあれ、地上戦を挟んでその前後の沖縄住民は二つの軍隊によって「占領」されていたのだ。その視点は、沖縄住民にとって、軍事占領による「継続する植民地主義」という論点をあらためて認識させるものである。(二二八頁)

戦後東アジアへと継続する植民地主義論の視点は、戦前／戦後の転換を前提とする日本の歴史研究の枠組みに対する批判を可能にする¹⁵⁾。この批判的立場は、歴史学における時期区分がだれの立場からなされるのか、歴史学そのものを政治的な編制として脱構築する契機をもたらしたのである。

興味が尽きないのは、ここで屋嘉比が、日本近現代文学研究者である佐藤泉の著作¹⁶に目配せをしつつ「東アジアに生きる人びとが相互にどのように出会い、そしてつながる可能性があったのか、未発の可能性も含めて、戦後東アジアの時空間を読みなおして検討する作業が私たち一人ひとりに問われていることは間違いない」と締めくくっている点である。これは文学批評による「メタヒストリー」をふたたびヒストリーの領分に導き返す奔流であり、「未発の可能性」とは、実証主義歴史学からの大いなる逸脱にほかならない。歴史学がつねに現在にかかわる倫理であることを了解可能にしてきた詩学の領分を受けとめる、史学からの応答のように読んだ。

そのような観点で、第一章「『国境』の顕現——沖繩与那国の密貿易終息の背景」は、今でこそ、日本とは別の歴史を持つ存在として沖繩を描き返そうとするときに散見される、海賊ロマンのニュアンスを湛えた海洋交易の実践や、固有の文化の根源として女の身体に降り注がれる偏向した熱病的視線の発症など、その後の沖繩をめぐる文壇を予期したかのような先取りされた批判として、読むことも出来る。もちろん、それらの軽佻浮薄な趣向とは無縁の、歴史家としての屋嘉比の姿勢が示された章であり、批判の先取りという点では、むしろ、非常に現在のな国境問題の浮上との関連、自衛隊配備強化の現在につながるヒストリーを展開する目論見として、読まれるべき章である。ここでも「沖繩では、『戦後』を問うことは『現在』を問うことであり、『沖繩の現在』を問うことは、『沖繩の戦後』を問うこと」なのである。

そして、先の第三章、第一〇章とのミッシングリンクのもうひとつが、ここに埋め込まれている。巻末の初出一覧によれば、『現代思想』二〇〇三年九月号という情報に括弧書きで「『継続する植民地主義』の終わりを追加」とある。これは、先に挙げた『沖繩の占領と日本の復興』の前編といえる『継続する植民地主義』に収められた論考の結語部分を追加した、ということの意味している。¹⁷⁾

『現代思想』二〇〇三年九月号所収論文の後、二〇〇四年一月に東京外国語大学で開かれたシンポジウム「東アジアの『戦後』を問う——植民地主義の再編と継続する暴力」での報告が土台となるこの文章は、第四節「米軍による与那国密貿易の一斉取り締り」を削除して新たな結語を加えたものであった。つまり与那国密貿易論文には二つのヴァージョンがあり、両者を過不足無く足し合わせたものが本書第一章ということになる。言い換えれば二つめの結語は、屋嘉比にとって重要な文章であったということだ。

比較検討するまでもなく、その箇所は一目瞭然であろう。大きくテンションが切り替わる二六二頁からの内容が、それに相当する。二〇〇三年一月に戸邊秀明から受けた教示に応答したとの注記が添えられた二つ目の結語は、植民者としての沖繩人から被統治者となった沖繩人を架橋する歴史記述の必要性を主張する内容であり、大戦を介した連続性と断絶性という歴史学の方法に、沖繩から応える試みであった。テッサ・モーリス・スズキの「連累」に言及しながら、顕現化する国境のただなかで暮らした人びととは、沖繩人とは、だれだったのかと屋嘉比は問う。

米軍占領下の「復帰運動の奔流」と現在に続くその解明という研究動向は、「帝国日本の台湾植民地統治における先兵の役割をした沖縄人の実態と記憶を隠蔽して、加害者としての沖縄人の記憶を切断し、被害者としての沖縄人の意識を肥大させる作用」があったのではないか（二六三頁）、との内省的な批判がそこには噴出している。筆者は、屋嘉比が、沖縄における反共アカ狩りの実証分析に向かわなかった系譜学をそこに見る。屋嘉比の戦後史プロジェクトは、統治権力としての米国による反共主義のローカルな現れ、ではなく、「折り重なる暴力」のなかで抑圧される人びとがどのようにそこから切断し逃れる道筋を胚胎したか、いかに「オートロハポン」「非国民」の思想を生きたかを問うプロジェクトへ向かったのであった。

残された論点

最後に、折にふれて屋嘉比さんとのゆんたくのなかで温め、頭の引き出しのなかに大切にしまったまま残された論点について、言及しておきたい。それはインテグリティ、愛郷心、当事者性、という三つの鍵で開けることができる。

本書に直接には現れないが、一連の論考が執筆された時期の屋嘉比を読むためのキーワードのひとつに、「インテグリティ」があると思う。二〇〇五年一〇月末、沖縄の大学教員・学生の友人たちと

ともに米軍基地再編の日米合意に対抗するため、「合意していないプロジェクト」を始動させたのだが、その打ち合わせや、行き帰りの車中でのゆんたくは、筆者にとり、屋嘉比さんの思索の森を覗き見る格好の機会だった。そのようなある時、インテグリティという語の意味・訳語について見解を問われたことがある。ウォルツァー研究者の川本隆史が、鶴見俊輔のインテグリティを高く評価していたことが気になっていた、という話だったと思う。研究者としての日常に連なる批判精神を問われた思いでしたが、この語につきまとう何かしらの「高潔さ」への違和感というものを、うまく説明できないままに、屋嘉比さんとの会話は立ち消えになってしまった。

いまひとつの鍵は「愛郷心」である。

S君、沖縄から「愛国心」を考える視点として、私が大切にしたいのは「国のために死ぬ」「国のために殺す」という勇ましい発言ではなく、家族や郷土を愛する自然な感情と連なっている「命の連鎖」という視点だ。それは、今日の恫喝を含んで声高に叫ばれている「愛国心」の言葉に対して、沖縄戦の具体的な事実¹⁸に学びながら世代間を継承して身につけていく言葉や姿勢である。

二〇〇六年、教育基本法の改定問題で愛国心の強制という問題が浮上していた。慰霊の日を迎えた

沖繩では新聞各社がこれにちなんだ評論を連載しており、そうしたなかの一つとして『沖繩タイムス』紙に掲載されたのが、右に一節を引用した『愛国心』を考える』である。この連載に対して筆者は、当時、「合意していないプロジェクト」のメーリングリストで、国家への愛を強要するのはおかしいが地域や家族を愛するのは自然な感情だ、という論には違和感を覚えると指摘した。これに対して即座に屋嘉比からの返答があった。

差出人：屋嘉比 収<yakabi@okinawa-u.ac.jp>

日時：2006年6月29日 18:36:41JST

阿部さんへ

応答ありがとうございます。阿部さんは、僕の文章の可能性を広げて読んでくれましたが、阿部さんもお気づきのように、私自身も書きながら危ういな、と感じていました。僕の文章の中にも、国家とは異なり、家族や郷土への自然な感情と、そつと密かに（笑い）書いた箇所があります。沖繩でものを書くとき、すつと、地すべりのように沖繩という「郷土」に誘惑されもたれかかり、流される危険性を感じます。阿部さんは、きちつとそのことを批判していると受け止めました。阿部さんの「当事者性」の「再定義」の論点も含めて。

さらに、「家族や郷土への自然な感情」とともに、書きながら危ういと思ったのは「命の連鎖」

という語句です。あの文脈は、「集団自決」の中から、自分の子供を結果として殺しながらも、生き残ることがその次の世代につながっていくという文脈で「命の連鎖」を強調したつもりですが、「死」に対して「命」として本質化されかねない、危うさがあります。

あらためて、自分の文章を読みながら、「国のために死ぬ」や「国のために殺す」だけでなく、「国のために生かされる」ということがはらんでいる問題が欠落していると感じました。

メーリングリストでのこの短い応酬を、筆者はその後、「沖縄・問いを立てる」シリーズへの寄稿のひとつの論点として採り上げることになる。屋嘉比さんのほうでも、ひとつの応答として論じたものが、同シリーズの論文（本書第一章）だったのだと、今では思う。本書『学びなおす』の合評会が、二〇一〇年三月六日に琉球大学で開かれた際にも、議論のための時間は充分ではなく（なにしろ久しぶりに屋嘉比さんと話をしたい多くの友人たちに囲まれてしまっていた）、改めてゆっくりと、インテグリティと愛郷心のことについて、討論してみようと暢気に構えていたが、そのチャンスは永遠に失われてしまった。

そう考えていたところ、ふとした機会に別の屋嘉比さんの論考を手にとった。それはパズルのピースがはまるようにカタリと音を立てて私の頭の引き出しのなかに場所を占めた。

屋嘉比収「沖縄のアイデンティティを語ること、そして語りなおすこと——『沖縄研究』の現在に

ついで」を所収した『地域の自立シマの力』は、沖縄大学の地域研究所創立一五周年を記念するシンポジウム「方法としての沖縄研究」をもとに出版された本である。¹⁹⁾

沖縄研究の制度化の両義性を批判的に考察するなかで、一九九九年の沖縄県平和祈念資料館問題、二〇〇〇年の「沖縄イニシアティブ」問題、二〇〇一年の沖縄研究国際シンポジウム皇族招聘問題の三つを具体的な事例として、近現代史に対する批判精神の不在に警鐘を鳴らし、アイデンティティを抹消しようとする動向や、日本のなかに消尽するべく個性を放棄する動向への批判に紙幅が割かれている。その際に屋嘉比が補助線としたのが、鶴見俊輔の「転向論」だった。

アイデンティティを批判する鶴見が別の選択肢とする「インテグリティ」の語を「対応での誠実さやまともな態度として理解したい」といったん引き受けた上で屋嘉比は、沖縄では「ある屈折を伴わざるをえない」という。「日米と沖縄との圧倒的な『非対称な力関係』を考えると、『インテグリティ』を確保するためにも『沖縄のアイデンティティ』という論点が手放せない²⁰⁾」のだという。「戦略的アイデンティティ」（スピヴァック）を彷彿するが、ここから屋嘉比は「別の局面では沖縄のなかで抑圧の役割を担う沖縄のアイデンティティを相対化し、ジェンダーや階層の視点と接合しながら沖縄のアイデンティティを外に向けて開くこと」、「沖縄の近現代史を語りなおすことで、沖縄のアイデンティティを新たに創り上げていこうとする視点」というふたつの啓示を導き出す。ここにホルのアイデンティティ論が引用され、そのダイナミックなアイデンティティの沖縄における実践系とし

て、辺野古の住民運動のなかで島ぐるみ闘争の歴史を再発見する若い世代に「現在の沖縄における、さまざまな出自、性、世代、階層を横断しながら、多様で変化を内包した新たな〈沖縄のアイデンティティ〉を創りあげていく一つの可能性」を見出す。これこそは「行為主体の運動」であり、「新たな関係性によって更新・生産されていく態度としての『インテグリティ』の考えにちかい」と、屋嘉比は論を閉じ／開いた。²¹

この〈沖縄のアイデンティティ〉創設の試みは、未来について清新なことばで開かれるいっぽうで、歴史分析の過去に対しては強い批判的態度として表明される。

だが、「沖縄の知識人」には、それは一つの陥穽でもある。そこで問われているのは、「知識人としての責任」なのに、ずっと「沖縄」をすべり込ませ、それに置き換えてしまう誘惑と欲望がある。伊波普猷を含む在京の「沖縄の知識人」に問われていたのは、「郷土沖縄」を思う愛郷心などではなく、「知識人」として「正義と真実に対する責任を貫くか、それを偽るかのどちらか」だったのだ。

それは、今日においても同様である。いまも「沖縄の知識人」に問われているのは、沖縄への愛郷心などではなく、サイドの言うように「弱い者、表象Ⅱ代弁されない者たちと同じ側に立ち」²²「権力に臆することなく真実を語る」姿勢である。

このような屋嘉比における沖縄インテグリティの思想を踏まえれば、あらためて、本書で何気なく持ち出されているように見える「当事者性」という語の深さを推し量ることが出来る。たとえばこの語を翻訳するとして、それはどのような語があてはめられるだろうか。体験者―非体験者という二分法から回避する目的以上の含意をそこに見出すことができるのではないか。

いかにしたら戦後世代の私たちが、非体験者である非当事者性を自覚しつつ、体験者の語る沖縄戦の教訓を分有して（当事者性）を獲得し、沖縄戦の内実に向き合うことができるか。その問いかけは、沖縄出身者であるから沖縄戦を知っており、自分が常にその中心に位置しているとの感覚を絶えず疑う、という考え方へと自ずとつながっていくことであろう。そしてそのことは、戦後世代が沖縄戦の教訓を分有することによって、沖縄戦そのものを相対化し、アジアに対する加害の問題を考えるうえで、一つの重要な糸口となると思われる。（v頁）

当事者とは、加害の当事者であるとの意味をも負わされた語の選択であった。新たな（沖縄のアイデンティティ）、「沖縄人に（なる）」とは、反基地運動のなかで自覚的に加害者性を獲得しようとしてきた沖縄の経験が織り込まれた、正義と真実に対する一貫性の表現だったのである。これは、権利

回復のためにまずアイデンティティを立ち上げること否定しないスピヴァックの戦略的アイデンティティ論や、第一章で屋嘉比が参照するテッサ・モーリス＝スズキの「連累」よりもさらにラディカルな地平を拓いていると言つてよい。

しかしいっぽうでインテグリティもまた、「共感の共同体」を構築する権力関係のアレゴリーなのだとしたら、と問うてみる必要があるだろうか。大きな物語（ドグマティックな史学）に対抗するものとして屋嘉比が提示する「私の物語」の、小さな物語をも貫く権力のアレゴリーを看取することは、屋嘉比が論じ続けた愛郷心の問題に接続する論点となる。この問いに対してこそ、死への共同体を脱臼する他者の声の亀裂、到来、偶発性に備わる出来事は、考察すべき事柄であったのではないだろうか。

さて、この僥倖を私たちは受け取ってしまった。今となつては、ここから先は、私たちの仕事、と
いうことになるだろう。

【註】

(1) 屋嘉比収「皇族の記念講演に異議／問われる近現代史の認識」(『琉球新報』二〇〇一年一〇月一七日)。

(2) 最近になって新川が述べる「まっとうな研究者も健在であると知らしめてくれた」との述懐に、筆者も深

く首肯するものである（新川明「天皇制と沖縄——試される個々の意識／国家にすり寄る負の精神」リレー連載「時の眼——復帰四〇年の軌跡」2、『琉球新報』二〇一一年八月三一日）。

(3) 第四章「仲間内の語りが排除するもの」の初出は、雑誌『EDGE』第一三号に掲載された二〇〇四年の文章である。これは論文という型を解除したエッセイとして書かれたもので、文末・巻末に注記や文献リストを備えていない。そのことの功罪はあろうが一点だけ、酒井直樹の「共感の共同体」への言及が埋もれてしまう。仲間内の語り起因して他者の視点の欠如と他者の排除の問題点としてとらえるべき（一一二頁）との指摘の重要性を、ここでは挙げておきたい。

(4) 小さなエピソードから書き起こされる問いの発見というこの種の文章で屋嘉比は、沖縄の運動の現場で生まれた小冊子『けーし風』への寄稿によって培われた技巧を発揮している。

(5) 残った論点として、例えば第二章「米軍統治下における沖縄の高度経済成長」で屋嘉比が導入したサイドの「対位法」は、結果として宜野座と伊佐浜を対照させてしまった点で失当ではなかったか、そのコンテキストも含めた分析については別の機会に論じたい。

(6) Stuart Hall, "Introduction: Who Needs 'Identity' ?" in Stuart Hall and Paul Du Gay eds. *Questions of Cultural Identity* (London: Sage, 1996), p.4.

(7) こうした問題提起の延長線上に、冷戦史観を脱構築しつつ、アジアの熱戦、経済成長と支配の交錯を解きほぐそうとする試みが始まっている。たとえば、鳥山淳「占領下沖縄における成長と壊滅の淵」（大門正克

- ほか編『高度成長の時代3 成長と冷戦への問い』大月書店、二〇一一年)、戸邊秀明「沖繩『占領』からみた日本の『高度成長』」(中野聡ほか編『岩波講座 東アジア近現代通史8 ベトナム戦争の時代 一九六〇—一九七五年』岩波書店、二〇一一年)。
- (8) 鶴見俊輔「対談の後考えた——臨床で末期医療見つめ直す」(『朝日新聞』二〇〇六年二月二七日)。
- (9) 大江健三郎「人はいかに学びほぐすか」(『朝日新聞』二〇〇七年一月二三日)。
- (10) 屋嘉比収「戦後世代が沖繩戦の当事者となる試み——沖繩戦地域史研究の変遷、『集団自決』、『強制的集団自殺』」(屋嘉比収編『沖繩・問いを立てる4 友軍とガマ——沖繩戦の記憶』社会評論社、二〇〇八年)。
- (11) 拙論「『集団自決』をめぐる証言の領域と行為遂行」(新城郁夫編『沖繩・問いを立てる3 攪乱する島——ジェンダーの視点から』社会評論社、二〇〇八年)。
- (12) そのタイトルからも、鹿野政直「兵士であること——動員と従軍の精神史」(朝日新聞社〈朝日選書〉、二〇〇五年)はぜひとも重ね合わせて読むべき書である。
- (13) 屋嘉比収「沖繩戦における兵士と住民——防衛隊員、少年護郷隊、住民虐殺」(吉田裕ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争5 戦場の諸相』岩波書店、二〇〇六年) 一七二頁。
- (14) 波平恒男「はじめに——『植民地主義はいかに継続したか』の解明に向けて」(中野敏男・波平恒男・屋嘉比収・李孝徳編『沖繩の占領と日本の復興——植民地主義はいかに継続したか』青弓社、二〇〇六年) 一〇頁。

- (15) ただし結果として残されたのは、沖縄戦前・中・後の反共・アカ狩りについての実証的作業である。事典編纂で沖縄の社会主義者について執筆した経緯にも目配りしながら、今後考えていきたい論点である。
- (16) 佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー——近代を記憶する場』（岩波書店、二〇〇五年）、同「始まりの反基地運動——一九五〇年代ナショナリズムの多義性」（中野敏男ほか編前掲『沖縄の占領と日本の復興』所収）。
- (17) 屋嘉比収「顕現する『国境』——沖縄与那国島の密貿易終息の背景」（岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社、二〇〇五年）。
- (18) 屋嘉比収「『愛国心』を考える——戦後六一年の沖縄から（下）」（『沖縄タイムス』二〇〇六年六月二九日）。
- (19) 屋嘉比は二〇〇四年七月一七日に開催された連続シンポジウム「方法としての沖縄研究」第七回「沖縄から見てくること——近代（アイデンティティ・国家）と学問」で、新崎盛暉、花崎皋平、鹿野政直の三者の報告を受けたコメントイターであった（新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立シマの力（下）——沖縄から何を見るか沖縄に何を見るか』（沖縄大学地域研究所叢書7）コモンズ、二〇〇六年）。
- (20) 屋嘉比収「沖縄のアイデンティティを語ること、そして語りなおすこと——『沖縄研究』の現在について」（新崎盛暉ほか編前掲『地域の自立シマの力（下）』所収）一四三―一四四頁。
- (21) 同前、一四六―一四九頁。

- (22) 屋嘉比取「強い愛郷の念を想像／権力臆せず真実語る必要」(リレー連載「伊波普猷批判序説」と現在」
2、『沖繩タイムス』二〇〇七年九月一八日)。